

徐渭の代応制詞16首について (その1)

村田 和 弘*

Study on Xu Wei's sixteen pieces of "Ci" poetry. (I)

Kazuhiro Murata *

Received October 31, 2006

Abstract

Xu Wei (徐渭) was an artist who was famous as a painter and a calligrapher and a drama writer in late Ming dynasty. But it is not known that he leaves poetry as a poet very much, and it did not almost attract attention till now among other his works that he wrote "Ci" (詞) poetry. As for his "Ci", 28 poems exist in all, and 16 poems are works by a ghost writer of "Ci" in response to an order of the emperor. I give translation with notes and interpretation to these 16 poems here and want to be based for study.

1. はじめに

徐渭 (1521-93), 字は文清, 後に文長と改める。号は天池, 田水月, 天池生, 天池漁隱, 青藤老人, 漱老人, 金壘, 金回山人, 山陰布衣など多数。また青藤道人とも号す。山陰 (現在の浙江省紹興市紹興県) の生まれ⁽¹⁾。明代中晩期の江南に現れた, 科挙に失敗し, あるいは自ら科挙を放棄し, 在野で文人として売文売画により生計を立てた下級知識人のうちのごく初期の一人である。当時の江南地方は豊かな経済力に裏打ちされた市民 (都市の住民) の勃興により, 文人が市井で芸術生活を送ることが可能となった。彼はそのような文人の先駆であるのだが, それよりも彼を特徴づけるのは, 狂疾により自殺をはかり, また妻を殺害して下獄されるという精神の振幅の激しさとあたかも相似するような激しい筆づかいにより生み出された書画の作品による⁽²⁾。

徐渭は嘉靖16年 (1537) に科挙の前段階である県の童試に落第して以降, 科挙 (郷試) には生涯合格せず, 嘉靖40年の郷試落第を最後に科挙による出世の道をあきらめた。科名で成就するところのなかった失意の知識人ではあったが, 嘉靖19年の童試落第後の再試験では県学の生

* 未来創造学部
School of Future Learning

員に取り立てられている。生員の資格を得ると秀才と呼ばれ、れっきとした士の身分となり税の免除の対象となるなど法の上で庶民とは区別される。また徐渭は嘉靖31年の郷試選抜の生員試験で第一位となり廩膳生員の資格を得ている。廩膳生員とは国家から食糧を支給される生員の身分のことである。つまり最末端とはいえ国家官僚につらなり、地方においてそれなりに名士としての名声を得ることのできる立場にはいたのである⁽³⁾。

こうした科挙を目指した文人として詩文にも通じ、さらに戯曲『四声猿』や戯曲の評論書『南詞叙録』を著すなど書画のほかにもマルチな才能を発揮している。従来、徐渭の作品では書画と戯曲について論じられることが多く、その詞については考察されてこなかった。本稿では光りのあてられてこなかった徐渭の詞について訳注を試み、従来の欠を埋める一助としたい。

2. 詞をめぐる評価

そもそも明代の詞は高く評価されていない。上は宋代の柳永、蘇軾に遠く及ばず、下は清代に及ばず、宋の高峰と清の秀峰にはさまれた中衰期というのが一般的な評価である。むしろ「詞は明代に減ぶ」「明代に詞なし」とさえ言われる⁽⁴⁾。例えば中田勇次郎は中国の詞史について次のように述べる。

「元王朝においては新興の戯曲に圧倒され、詞の影は次第にうすれ、その歌法も多くは滅亡していた。明王朝になると花間集や草堂詩余の余韻を慕うものが多く、ふたたび詞は文人たちのあいだによみがえり、ついに清初に至って詞の研究者や作者が激増し、一時また宋時代につぐかとおもわれるほどの盛況を呈したが、結局、宋詞の華やかに繁栄したのには及ばなかった。」⁽⁵⁾

この説をパラフレイズしつつ確認すれば、詞の起源とされる晩唐から五代そして宋までの詞を頂点とし、元以降、韻文学は曲の時代へと移行しており、詞の詠歌法の伝承も途絶えたため衰退の一途をたどった。明代に『花間集』や『草堂詩余』の出版が相次ぎ、陳子龍など一部の文人の手により詞文学は明末から清初にかけて一時復興したが、頂点にはやはり及ばないというものである。詞文学についての発展史観が明晰に述べられているが、明の詞については清初の再興を導いた陳子龍に触れるに留まる。

よく知られるように、陶望齡（1562-?）の「山人徐渭伝」には、徐渭自身が「吾が書第一、詩第二、文三、画四」と語り、周囲の評価もそうであったという記事を載せる⁽⁶⁾。書の価値が最も高く、次いで詩、文であり、画は余技という意識である。画より詩文を高く置くところに士大夫としての矜持がある。画は職業的な画工のよくするところというイメージがあった。また袁宏道（1568-1610）の「徐文長伝」には、袁宏道が徐渭という先人を「発見」したエピソードが記されている。はじめ袁宏道は『四声猿』を読み、その「意气豪達」が近頃の書生の作と全く異なり、「強心鉄骨さと、一種の磊塊たる不平の気が、字画の中に、ありありと見て取れ、たいそう驚いた」。その後、陶望齡の書楼で闕編詩を読み、数首も読まぬうちに驚き、陶望齡からそれらの作者が徐渭であることを教えられる。そして徐渭の詩について次のように評する。

其の胸中にはまた一段の摩滅すべからざる気、英雄の路を失ひ、足を托すに門なしの悲しみ有り。故に其の詩を為すや嘖るが如く笑ふが如く、水の峡谷に鳴くが如く、種の土より出でるが如く、寡婦の夜泣き、旅人の冬に旅立つが如し。まさに其の意を放ち、平疇千里をゆくべし。時に幽峭、鬼の秋墳に語るあり⁽⁷⁾。

その豪放さと屈曲した陰しさを指摘する袁宏道の文章が以降の徐渭詩の評価を決定付けた。嘉靖から万暦にかけて詩壇は李攀龍や王世貞ら前・後七子の復古主義に席卷されていた。袁宏道はそれに飽き足らず、個性の束縛されない表出を重視し、公安派と呼ばれる思潮を形作る。それにかなう先人として徐渭を「発見」したのである⁽⁸⁾。徐渭に時流に逆らう韓愈や李賀のような陰怪さを見出し、何よりも人生そのものの「奇」が詩文に表出されていることに驚いたのである。伝の末尾に袁宏道は次のように記す。「梅客生嘗て余に書を寄せて曰く、文長は吾が老友、病は人より奇なり、人は詩よりも奇なり、詩は字よりも奇なり、字は文よりも奇なり、文は画よりも奇なりと。余謂へらく、文長、之れ(病)無かりせば奇あらざる者なり、之れ無かりせば奇あらず、斯く之れ無かりせば奇あらざらんか、悲しいかな。」このように、明末の文人にとり、徐渭の価値はまずその詩であり戯曲であったと言えるだろう。詩と詞では、文人の意識の中では価値の差があることは、詞が詩余とも呼ばれることから明らかだが、徐渭自身の意識では形式による価値的な区別はそれほどなかったのではないか。現在、上海博物館に蔵される「行草書李白詩蘇軾詞卷」は「第七、第八の出典を詳らかにしないが、…第一首、李白「憶旧遊寄譙郡元參軍」。第二首、劉長卿「明月湾尋賀九不遇」。第三首、劉希夷「代白頭吟」。第四首、李白「採蓮曲」。第五首、李白「夢遊天姥吟留別」。第六首、蘇軾「蝶恋花詞」。第九首、李白「橫江詞」⁽⁹⁾を、書体を変えながら書きつらねた、7メートルを優に超える横巻である。第9首の最後の一画が横巻の上から下まで一気に一息に引かれている筆遣いなどを見ると、詩と詞という形式上の意識はすでになく、徐渭の心情の表出という面では差がないと思える。韻文文学として徐渭が詞も残したことは、注意されてよいのではないか。

3. 資料の確定

まず徐渭の現存する詞が何首あるかを確定しておこう。通行本徐渭集⁽¹⁰⁾は、その出版説明によると、『徐文長三集』『徐文長逸稿』『徐文長逸草』の三書を合わせ、そのほかに『盛明百家詩』収『徐文学集』と陸長侯輯『一枝堂稿』2巻及び書画題記から補編を附す。前述の陶望齡の「山人徐渭伝」には徐渭の著作として「文長集、闕編、桜桃館集各若干巻」があり、陶望齡がそれらを合刻したものが『徐文長三集』29巻附『四声猿』1巻である。鍾人傑がこの『徐文長三集』を改編したものが『徐文長文集』30巻であるが、節略本であり、海山仙館叢書本の青藤書屋文集がこの書物であるという。その後、張岱が遺文を集めて編纂したものが『徐文長逸稿』である。徐渭集は『三集』『逸稿』について具体的にどの機関が所蔵するどのテキストに基づいたのかを明記していないが、まずは信頼できるであろう。『徐文長逸草』は沈氏抱經堂旧蔵鈔本を排印したものであるが、詞を収録していないので、今は述べない。したがって徐渭集から見ると、『徐文長三集』巻12の詞に収める26首、『徐文長逸稿』巻12の詩余に収める2首(同じ題名で2首作られているので、実数は3首)、合計28首が、現存する詞のすべてとな

る。以降の考察の範囲はこの28首に限定される。

4. 詞28首の内容

28首の内容を整理すると、以下のようになる。徐渭集を底本として用い⁽¹¹⁾、便宜のため順番に『三集』は(1)から(26)まで、『逸稿』は(27)(28)と番号を附す。

A 代応制	16首(1)～(16)	: 詠物
B 風景をうたう	2首(17)(18)	: 湖
C 思いをうたう	2首(19)(20)	: 詠懷
D 画をうたう	3首(21)(22)(23)	: 詠画
風景画	1首(21)	
美人画	2首(22)(23)	
E 女性をうたう	2首(24)(25)	
F 友人のためにうたう	1首(26)	
G 友人の科挙合格のためにうたう	2首(27)(実数は2首)(28)	

一見したとおり、Aの代応制詞が半数以上を占めていることが特徴的である。次に画を詠う詠画詞が多く、美人画をうたう詞を含めて女性に関するものが多いことも特徴の一つにあげられる。『逸稿』の2首は張元汴が科挙に状元合格したことを賀す詞である。張元汴については後で述べる。こうしてテーマだけを見ると、確かに諸家が喧伝するような豪放さ、詰屈さ、激しさに乏しい。そのため、例えば梁一成は徐渭の詞について、女性を詠じたEの2首などを含め「遊戯性」の詞が半数を占めると評し、Aの代応制詞については「太平を歌詠し、聖主を頌揚することを以て要旨と為し、張元汴の為に典故の意境を供給するに等しい。万暦年間、詞臣たちが作詞を以て応制とするは、かえって是れ一条の有趣の掌故である」と断じる⁽¹²⁾。つまり徐渭の詞は遊戯性の詞と宮廷の風潮に沿った代応制の詞の二つであると言っており、総じて高い評価を与えていない⁽¹³⁾。だが遊戯性のある詞や代応制の詞に、価値はないのであろうか。

28首のなかで清朝の康熙帝御定『御選歴代詩余』に選ばれているのは、Eの2首のみである。したがってこの2首は当時からよく知られていたと言える。また『御選歴代詩余』巻120詞話、徐渭の個所ではDの(22)について「靈慧絶倫」という屠隆の言葉を引く。いずれにせよ、女性を詠じた遊戯性のある詞が当時において人々に歓迎されていたことは間違いない。さらに『徐文長三集』巻首に置かれた、章重の「夢遇」は刻本の勝手な字句の改竄例をいくつかあげ、詞の例として(18)「八月十六夜泛舟西湖」に触れるが、章重はその題名を「八月十六携妓泛月西湖」としている。どちらが正しいのか今のところ断言できないが、中秋のとき妓女を連れて西湖の月を見に舟遊びするというほうが、当時の文人としてはむしろ一般的であったろうことは想像に難くない。そして明の中晩期という背景を鑑みれば、徐渭が例外だったと考えることもできない。現代の徐渭像が「狂」という片面のみを偏重したイメージであることにあらためて気付かせるものである。詞から見た徐渭像を考察するゆえんである。

5. 代応制詞16首作詞の時期

本稿では、28首のうちAの代応制詞16首について訳注を試みたい。代とは人に代わって代作すること、応制とは皇帝の命令で詩文をつくることであり、代応制とは、したがって、皇帝から詩文の製作を命じられる立場に立つ人のために代作することをいう。徐渭の場合、その詞が現存する詞の半数以上の16首存在することになり、特徴の大きな一つとなっていることは前述の通りである。

これら16首がいったい誰のために、いつ作られたのであろうか。徐渭と密接な関係があり、なおかつ皇帝に直接詩文を呈上できる立場にあった人物として2人が考えられる。1人は胡宗憲、もう1人は張元汴である⁽¹⁴⁾。まず胡宗憲との関わりから見てみよう⁽¹⁵⁾。嘉靖31年(1552)から汪直らの率いる倭寇が浙江沿岸を犯し始めると徐渭は守城防衛戦に自ら乗り出し、戦略の才能を発揮する。嘉靖33年(1554)胡宗憲が浙江巡按御史として対倭寇防衛を指揮、35年には兵部右侍郎として総督となり、徐海らの倭寇を退けて、36年(1557)浙江巡撫を兼任する。おそらくこの頃に徐渭は胡宗憲の幕府に招聘された。自作の年表である『畸譜』によると「三十七歳。季冬、胡幕へ赴き四六を作り京貴人へ啓す、作り罷りて便ち辞し帰る。」⁽¹⁶⁾とあるから、36年旧暦12月に胡宗憲の幕府へ赴き美文を代作する文書係として働いたことがわかる。また翌年には「白鹿を献じる表」を書き、大いに嘉靖帝に喜ばれた。陶望齡の「山人徐渭伝」には「表進められ、上、大いに其の文を嘉悦し、旬月の間に遍く人口に誦する。公、是を以て始めて渭を重んじ、寵礼独り甚だし。」とある。徐渭の文章が皇帝の褒めるところとなり、やがて人びとに知られ、そうしてようやく胡宗憲は徐渭を重視し礼遇したとあるところを見ると、明らかに胡宗憲は、徐渭の倭寇戦の戦略家であるという自意識とは別に、実戦の役に立つ者としてではなく有能な代作者と見ていたことがわかる。嘉靖39年(1560)胡宗憲が太子太保を加えられ、杭州に鎮海樓を建築、「鎮海樓記」を書いた潤筆料として220両の銀子をもらい、その金銭をもとに徐渭は紹興城内に屋敷を購入し、嘉靖42年(1563)に転居している。その前年、嘉靖41年に胡宗憲は嚴嵩との繋がりや糾弾され罷免されて獄に下されるから、胡宗憲との関わりはこの年までである。このように有能な幕客として代作詞を代作した可能性はあろう。ただし悪評の高い嚴嵩に諂い出世した胡宗憲を、徐渭は本来は忌避していたであろうし、なによりも倭寇戦略の才能を認められなかったところが詞に反映しているかどうか判断のポイントとなろう。また一般的には徐渭が狂疾を発症したのは、パトロンであった胡宗憲の下獄と獄中死という政治環境が過重な圧力として働いたためと考えられている。

次に張元汴との関わりはどうか。嘉靖45年(1566)徐渭は発病のため妻を殺害し獄に下される。前年には自殺をはかるなどしており、この時期、徐渭の精神状態は極度に悪化していたといえる。獄中で徐渭は『參同契』の注釈に専心し、道教の修養の道を篤信するようになる。隆慶3年(1569)に手かせが解かれ手足の自由を得る。徐渭が書法に意を用いるのはこの頃からである。隆慶5年(1571)の科挙において、徐渭の友人、張天復の息子である張元汴が第1甲第1位すなわち状元に及第し翰林院修撰を受けられる。徐渭が慶賀のためにGの詞2首を撰じたことは前述の通り。そして1573年に万曆帝が即位し、徐渭も恩赦に遇い保釈積いで釈放される。その後、万曆元年に張元汴が父の服喪のため帰郷、『山陰県志』の編纂を行うにあたり徐渭を推薦、その功あつてか万曆2年(1574)に正式に釈放される。このように獄を解かれ

るにあたり張元汴の働きかけが多大にあった。そのことを陶望齡の「山人徐渭伝」では「獄事の解、張宮諭元汴力めて多しと為す。」と記している。詳細は略すが、その後、徐渭は北京、居庸関から朔北の宣化府に赴き北方の風物とモンゴル族との戦争の地を目にし、また北京では張元汴の屋敷に泊し、秘書のような仕事をしていた。徐渭の生涯の中で最も晴れやかで活動的であったのが、この万暦初期の数年間である。このような時期に、張元汴のために詞を代作した（あるいは代作の準備をした）可能性は高い。何よりも張元汴自身が翰林院修撰という詩臣であったし、慶賀の詞が現存していることも大きい。また詞のなかに朔北の風景や北方の対胡族戦などが反映されているかどうか、この時期であるかどうかの判断のポイントとなるであろう。

結論から先に言えば、代応制詞16首は、おそらく北京で張元汴の屋敷に居たときの作と考えてよいと思われる。このことは訳注の後であらためて考えたい。

6. 詞16首の訳注

16首はすべて以下のように、それぞれ自然、季節、文人の愛玩物などを題とし、題にまつわる詩想、イメージをめぐらすという詠物詞である。同じ詞牌のものをひとまとまりとして整理すると、次のようになる。順に番号、題名、詞牌を表す。

- (1) - (4) : 日・月・風・雲 : 漢宮春
- (5) - (6) : 霜・雪 : 応天長
- (7) - (8) : 山・水 : 齊天樂
- (9) - (10) : 霜・雪 : 念奴嬌
- (11) - (12) : 秋・冬 : 千秋歳
- (13) - (16) : 研・筆・墨・劍 : 鳳凰台上憶吹簫

題名を見ると、(5)・(6)と(9)・(10)が霜・雪と同じであり、(11)・(12)の秋・冬も霜・雪と季節的には同じであるから、結局、代王制詞16首のうち、秋・霜、冬・雪という似通ったテーマが6首を占めていることがわかる。残りは自然が6首、愛玩物が4首で、それぞれテーマ的にまとまりが見える。以下16首の訳注を試み解釈を加え、徐渭詞を考える上での基礎としたい。押韻箇所は○で平声の押韻を、●で仄声の押韻を示す。

(1) 日

何年造物，巧飛馳駒隙，琢就烏輪。才上千山頓紫，万里俱明。祥雲綺霧，齊簇擁帝闕宸京。天公意，綵無私照，偏濃仙掌金莖。分取余光下土，能俯鑑葵心委赤，萸萸舒青。更有鳳凰鳴瑞，魑魅潛形。惟応野老，此時動獻曝微誠。終古同天不息，朝朝西墜東昇。

「日」

いつの造物であろうか、巧みに飛んでは年月を走らせ、磨かれてカラスの棲む輪となる。千の山々から昇ればにわかには紫となり、万里にわたり明るくなる。めでたい雲や綺麗な霧が、いっせいに天子の宮城を抱くように集まる。天の心は、なべて私照ないが、宮中の承露盤の銅柱はひとえに輝きが濃い。

余光を分け取って天下に下し、よく天子の徳を敬う委赤たる心を照らし映し、こよみ草は葉をのぼす。さらに鳳凰はめでたく鳴き、魑魅は形を潜める。ただまさに野老のみ、このとき献上し微誠を曝す。いつまでも天を同じくしてやまず、毎朝西に落ち東より昇る。

前関はまず太陽についての神話的イメージから詠み起こす。「駒隙」とは馬がわずかの間を奔り去るほどに月日が速く過ぎ行くことを言う（『史記』「留侯世家」）。だが「馳」は他動詞であり、この場合、自然界の太陽の運行を、神が太陽を載せた馬車を御して天を駆けているとする神話を踏まえる。唐の『初学記』巻1「日」に引く『淮南子』には「日 陽谷より出で、咸池に浴し、扶桑に拂る、是を晨明と謂ふ。……爰に羲和を止め、爰に六駿を息はす、是を懸車と謂ふ。」という有名な一文を載せ、日の出から日没までの太陽の呼び名が記されるが、太陽は懸車と呼ばれる馬車に乗っており、羲和という神が六頭の龍を御して運行していると考えられていた。同じく『初学記』は『広雅』の「日の名は耀靈、一名は朱明、一名は東君、一名は大明、亦た名は陽鳥、日の御するを羲和と曰ふ」を引き、その注に『山海経』を引き、次のように言う。「東南海の水、甘泉の間に、羲和国有り。女子有り羲和と曰ひ、帝俊の妻為り。是れ十日を生み、常に日を甘泉に浴せしむ。」羲和は女性神であり帝俊の妻である。十個の太陽を生み、甘泉で湯浴みさせたという。湯浴みのあと天を駆けていくのだから、運行に関しては『淮南子』と同じであるが、太陽を女性神としているところは、母系社会のより原始的な意識を反映しているであろう。また『広雅』には太陽の別名として「陽鳥」があげられているが、これもやはり『淮南子』に「日の中に跋鳥有り」つまり太陽に三本足のカラスが棲むとする古代の考えを反映する。太陽の黒点をカラスに見立てる発想である。ところでここまであえて『初学記』のみから考察したのは、この神話的イメージが『初学記』のような作詩用語集に見えるものであることを述べたいためであり、つまり典故の応用としては一般的である。以降は描写的叙述を続ける。朝焼けの彩雲が宮城を包み込み、視点が宮庭に聳える承露盤の銅柱にクローズアップされ、その金属の肌をひとときわ明るく輝かすというイメージは美しい。

後関は前関の明るさを継続させて、太陽が遍く世界を照らすように天子の徳が天下に行き渡することをテーマに詠む。「葵心」という言葉は、あおいの花が日の光りに向かって傾くように天子の徳を慕う人びとの心をいい、日をテーマとする詩の中に詩語としてよく読みこまれる。「蓂莢」はこよみ草のことで、『初学記』巻1「月」から拾えば、『帝王世紀』に「堯の時に草蓂莢の階より生ずる有り。毎月朔日に一莢を生じ、月半ばに至れば則ち十五莢を生ず。十六日より後に至れば、日に一莢を落とす。月の晦に至れば尽く。王者 是を以て曆を占ふ。」とあり（『竹書紀年』も同じ）、また『抱朴子』「対俗」を引き「昔、帝軒候は鳳鳴を以て律を調へ、唐堯は蓂莢を観て以て月を知る。」という。これらの典故から「蓂莢」はもともと月の詩語であることがわかる。徐渭が日の典故として用いたのは、「月の晦」つまり月末の日のことを「晦日」ともいい、「日晦 蓂莢に随ふ」（唐、杜審言の「晦日宴遊」詩）という詩句が存在するからではあるが、むしろ前句の植物の葵と対を成すために選ばれたと考えられる。さらに葵のような赤心と蓂莢の葉の青とが色彩としても対比される。以降の瑞祥の鳳凰が現れ、魑魅魍魎は地にもぐり、天下太平であることを頌し、在野の遺賢としてわずかでも誠意を尽くすためにこの詞を献上すると詠うのは、徐渭の心持ちにほかならない。永遠にこの世界が続くことを嘉して第1首は終わる。

(2) 月

氷輪掛処、有千尋丹桂，七宝層樓。正值一天鋪霽，万里横秋。井梧岸柳，伴砧声一葉西流。当此際，征衣戍婦，何人不動離愁。問甚嫦娥靈藥，夜夜对青天碧海，応悔曾偷。且喜畢離雨順，暈少風柔。陰陽變理，問道傍不喘吳牛。影裏山河大地，万年長印金甌。

「月」

氷輪の掛かるところ、千尋の丹桂、七宝の層樓あり。まさに天の晴れ渡り、万里に秋横たわるとき。井戸の梧桐、岸辺の柳、砧の音に伴い一葉西に流れる。このときにあたり、国境の守備兵とその妻、誰か離愁を動かさざらん。

嫦娥の靈藥とはなにかと問う、夜ごと青天碧海に向かい、まさにかつて盗みしを悔やむべし。しばらくは月が雨降り星に付けば雨が従い、月のかさが少なければ風柔らかなるを喜ぶ。陰陽調和し、道端で吳牛の喘がざるかを問う。月光のなか山河大地に、万年とこしえに金の甌を印す。

月についての詩語も、まずは『初学記』巻1「月」からひろってみよう。「丹桂」は、現代中国語ではキンモクセイを指すが、詩語では月に生えているという桂樹を指す。虞喜の『安天論』を引き「俗に月中に仙人、桂樹ありと伝ふ」という。月はその満ち欠けを繰り返す神秘さから神仙の不老不死と結びつき、神仙信仰の中で月の中の桂の木というイメージが出来上がっていた。「七宝層樓」は不老不死を会得した仙人の住む豪華な樓閣であり、この詞はまず神仙的イメージから詠み起こしているといえる。次に月からの連想で秋の季節を描写したあと、前関末は、よく知られた月の機能として、遠く隔たった者同士の心を結びつけるというイメージを用いている。例として、唐、李白の「子夜呉歌」を引いておく。

長安一片月	長安	一片の月、
万戸擣衣声	万戸	衣を擣つ声。
秋風吹不尽	秋風	吹いて尽きず、
総是玉関情	総べて是れ	玉関の情。
何日平胡虜	何れ日か	胡虜を平らげ、
良人罷遠征	良人	遠征を罷めん。

月光のもと服を洗う砧の音が響き、空間を守る女性の心は遠く国境防衛に徴兵された夫のところへ飛ぶ。李白の「子夜呉歌」が南朝の民謡の定型表現を踏まえるものであり、徐渭もさらにそれを踏襲している。

後関は、前関末の夫と離別する女性の離愁の情感を引き継ぎつつ「嫦娥奔月」神話を引用する。『芸文類聚』巻1天部「月」に引く『淮南子』に「羿 不死の薬を西王母に請ふ。姮娥之を竊み月宮に奔る。姮娥は羿の妻なり。服薬して仙を得、月中に奔り入りて月の精と為る。」と見えるものであるが、寒々とした月宮で夫から離別したことを悔やむ女性として描かれることも多い。次の唐、李商隱の「常娥」詩はその代表であり、徐渭の典故とするところでもある。

雲母屏風燭影深	雲母の屏風	燭影	深く、	
長河漸落暁星沈	長河	漸く落ち	暁星	沈む。
常娥応悔偷靈藥	常娥	応に悔ゆべし	靈藥を偷みしを、	

碧海青天夜夜心 碧海 青天 夜夜の心。

その後、助辞の「且」によりイメージを一転させ、自然現象の恵みを祝す。「畢離雨順」は『詩経』小雅「魚藻の什」の「漸漸之石」第3スタンザ「月 畢に離り、滂沱たらしむ」にもとづく。「畢」は畢星で雨降り星のこと、二十八宿の一つ。「離」はつくこと。毛伝に「月 隠星に離れば則ち雨る」とある。『詩経』の句は、月が畢星につくと、滂沱と雨ふらせる、というものであるが、この自然現象を詠む句に、天子の徳のゆきわたる意を重ね合わせたのは、天人相関思想に基づき解釈を行なった漢代の緯書である。『詩緯』に「月 畢に離り、滂沱たらしむ、とは、畢が雨を主るを言ふ。月 其の舎に離れば、大雨必ず行はる、人君の心術の滋和たるを象り、賢良の臣の之を佐くる有りて、思膏 下に流ること、甘霖の大沛たるが若し」と述べている⁽¹⁷⁾。あるいは次句に「風柔」という表現のあるところからすれば、『文選』に載せる張協「七命」の「南箕の風、其の化を暢ぶる能はず。離畢の雲、以て其の沢を豊かにする無し。」に附した李善注に引く『春秋緯』の「月 其の行を失ひ、箕に離れば風ふき、畢に離れば雨る。」を踏まえるものかもしれない。いずれにせよ緯書を典故とすることは注目される。「吳牛喘」は『世説新語』「言語」に見える満奮の言葉で、暑さに懲りた吳の牛が月を見ても喘ぐことを言う。暑さに懲りる牛のいないことを尋ねることで天子の恩徳により自然の調和が保たれていることを詠む。これも『初学記』「月」の「事対」にそのまま見えている典故である。末尾の「金椀」は遊戯的な月の見立てである。

(3) 風

蓬蓬颯颯，正初噫大塊，乍起青蘋。早被蛇憐北海，鵬借南溟。推雲送雨，捲長空一霎澄清。將止處，留將細裊，催開翠葆紅英。太平久歇條鳴，豈盡閔風姨力量，少女神靈。要識調和有道，感召無形。阜財解慍，韻五絃共繞虞廷。散取微涼殿閣，普天何處炎蒸。

「風」

さっさつと吹く風は、まさに大地の原初のかくび、たちまち青蘋の上を吹く。つとに蛇は北海に憐れみ、鵬は南溟に借りる。雲を推し雨を送り、はてなき空を巻きあげれば空はたちまち澄み渡る。まさに止まらんとするところ、細くしなやかに留まり、緑茂り紅の花の開くを促す。

太平の世に久しく長く鳴らすことを歇む、どうしてことごとく風姨の力量、少女の神靈に関わろうか。調和有道を識らんとし、感じて無形を招く。豊かな財産は民の怒りを解き、五絃の琴の調べは舜帝の朝廷をめぐる。散じては微涼を殿閣に取り、普天のもといずこか炎蒸あらん。

前閔は『莊子』「齊物論篇」の「夫れ大塊の噫気は其の名を風と為す。」を典故とする壮大なイメージから詠み起こし、「北海」「南溟」もそれぞれ『莊子』にもとづく。前者は「秋水篇」に「蛇は風を憐ひ……蛇曰く、夫の天機の動く所は、何ぞ易ふべけんや。吾れ安ぞ足を用いんやと。蛇、風に謂ひて曰く、……今、子は蓬蓬然として北海に起り、蓬蓬然として南海に入る。」とあり、後者は「逍遙遊篇」に「北冥に魚あり、……化して鳥と為るや、其の名を鵬と為す。……是の鳥や、海の運くとき則ち將に南冥に徙らんとす。」とあり、また林希逸『南華真経口

義』に「海動けば必ず大風あり」というところにもとづく。以降は風の吹く情景を、空の清澄さから眼前の花や緑へ移行する視点の動きにより描写的に叙述する。

後関は多く神話を引用する。風姨は古代の神話で風を司る神で風伯のこと。『北堂書鈔』巻144に引く『太公金匱』に「風伯、名は姨」と見える。風伯は飛廉ともいい、『楚辞』「遠遊」に「飛廉を前にして以て路を啓かしむ、……風伯、余が為に先駆し、気埃、辟けて清涼なり」と詠まれる神である。「少女神靈」は不詳。「解慍」は「南風の薫、以て吾が民の慍りを解く可く、南風の時、以て吾が民の財を早くす可し。」(『孔子家語』「弁楽解」)を踏まえる語。これは中国古代の聖天子、舜帝が、五絃の琴をひきながら歌ったといわれる「南風の詩」で、天下が治まり人民の生活が豊かになることを願って歌った詩という。虞は舜が堯から天下をゆずりうけて帝位にあったあいだの名であり、有虞氏ともいう。これら古代の風の神や聖天子を典故として用い、現今の世の天下泰平を頌し、暑さにあえぐ民のいないことを喜ぶのである。

(4) 雲

紛紛郁郁，黯無心出岫，噓氣從龍。正好釀霖救旱，捧日当中。御爐仙掌，和篆縷細繞輕籠。彤芝外，朝朝長護，玉皇一朵偏紅。 伝道上天下地，更有甚巫山神女，崑崙頂豐隆。此說多庇無拋，畢竟誰逢。小臣書瑞，願年年五色從東。別取嵐光霞影，遙天点綴青峰。

「雲」

かぐわしい黒雲が自然に山の洞より、龍の吐く息に従い沸き起こる。ちょうど良くながめを醸して旱を救い、真上で太陽を捧げ持つ。宮中の炉や承露盤に、篆文と調和してこまやかにそっとたちこめる。宮庭の外、毎朝とこしえに護り、皇帝に一片赤い花を捧ぐ。

伝え言うところ天に上り地に下り、更に甚だしきは巫山の神女の化身、崑崙の頂に豊隆に乗るの説あり。この説多くまさに根拠なく、いったい誰が逢うことがあろう。わたくし小臣ながらめでたき兆しを書きしるし、毎年五色の雲の東より起こるを願う。他に嵐光や霞影を取りて、はるかなる空、青き峰に添えん。

雲という題で、前関でまず黒雲を歌うのは意表をつく表現であるが、これまで徐渭は雨や風を恵みをもたらすものというイメージで一貫して描いて来ていることから理解できる。この詞はさまざまな典故が列挙されている。「紛紛」は多いさまで、唐、杜甫の「貧交行」に「手を翻せば雲と作り手を覆せば雨り、紛紛たる輕薄何んぞ数ふるを須るん。」と雲、雨とともに用いられているのを踏まえよう。「郁郁」はかぐわしい、香気のさかんさま。恵みの雨をもたらすからこそ芳しいと表現される。「黯」は黒くたちこめること。「出岫」は晋、陶淵明の「帰去来辞」に「雲 無心にして岫より出で、鳥 飛ぶに倦きて還へるを知る。」と描写されるように、世俗を超越した自由自然のイメージで用いられるのが普通であるが、ここは天の意志の働きをいう。「從龍」は、『易経』「乾」の「篆伝」に「雲行けば雨 施さる」とあり、その「文言伝」に「雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ。」とあるところにもとづく。また『史記』巻61「伯夷列伝」に同文を引き、集解に「王肅曰く、竜拳がれば景雲属なり、虎嘯おけば谷風興る。」という語を引く。雲が龍の息より生じるというイメージはこれらの典故から作られたのであろう。早はひでりであるが、『周礼』「春官」の「保章氏」には「五雲の物を以て吉凶、水旱、豊

荒を降すの禱象を弁ず。」とあり、雲との関連が見られる。「捧日」は太陽を捧げ持つことで、主君に忠誠をつくすことを意味する。『三国志』巻14「魏書」の「程昱伝」注に「両手もて日を捧ぐ」とあるところを踏まえる。「彤芝」の「彤」は赤色のこと。彤墀という語があり、天子の墀は赤く塗ることから宮中の庭を指し、彤庭も同じ意味で使われる。おそらくここはその意味で使われているのであろう。「玉皇」は皇帝のこと。宋、蘇軾の「上元、楼上に侍飲す三首、同列に呈す」詩「その1」に「侍臣鵠立す 通明殿、一朵の紅雲 玉皇を捧ぐ。」とあるところを典故とする。黒雲から詠み起こし最後は茜色のめでたい霞へと変化している。

後関はまず神話伝説を典故とする語を並べる。「巫山神女」は宋玉の「高唐賦」で詠まれた、雲雨の情を楚の懐王に夢で告げた神女であり、「崑崙頂」は『列子』『周穆王』に「別に日の崑崙の丘より昇り、以て黄帝の宮を観る。」と見えるものであろう。また『穆天子伝』には「西王母 天子の為に謡ひて曰く、白雲 天に在り、山陵より自から出づ。」とあり、神女と同様に西王母をイメージさせる。「豊隆」は雲を司る神の名で、雲師、雷師ともいい、『楚辞』「離騷」に「吾れ豊隆をして雲に乗り」と見える。これらを列挙した後、徐渭はいったい誰がそれらの神や神女にあったらうかと述べ、一転して今の世の五色の瑞雲を願い、前関の発端と対応する山の、前関末尾の赤い花と対応する青い峰へと回帰して詞を結ぶ。

7. 小結

ここでひとまず「漢宮春」を詞牌とする最初の4首について、その特徴をまとめておく。まずこの4首がひとまとまりのものと意識されていたことは、詞牌のみならず、構成面からも確認される。「日」の中であえて本来は「月」の縁語である「萸萸」を用い、「月」の中で「畢離」という『詩経』以来の詩語を用いつつ「風」とのペアを導き出し、「風」の中で「推雲」を縁語として出し、「雲」の中では「早」から太陽を連想させて「捧日」という語を導いている。4首で一巡りする構成が当初からの意図的なものであることは明らかだろう。また各詞とも慢詞の詞型を採り、前関と後関の2段から構成されるが、前後の連繋は並列的対比ではなく、前関末のイメージを後関が引き継ぐかたちで連接され、過度の叙情性は避けられている。

むろんそれは応制という詞の場から、やむを得ぬものではあろう。ただ典故の使い方を見ると、応制の、しかも代作であるということ以上の、徐渭の個性的側面が見えてくる。それは神話的イメージの多用という点に端的に示されている。(1)(2)の『淮南子』を典故に用いた神話的表現は、すでに述べたように『初学記』や『芸文類聚』など唐代の作詩用語集に見える程度のものであり、決して珍しいものではない。だが(2)で緯書の解釈に近づき、(3)で『莊子』や『楚辞』あるいは李商隱の詩を引用し、(4)で「高唐賦」や『列子』『楚辞』などの語句を散りばめるのは、典雅を逸脱した、紛れもなく徐渭の神仙信仰に傾いた表現である。ここで徐渭の信仰の方面に深く入る余裕はないが、例えば友人、蕭翊のために書いた「蕭女臣墓誌銘」にその嗜好について「女臣、挙業を喜ばず、独り秦漢の古文、老莊諸子、仙釈経録及び古書法を喜ぶ」と記し⁽¹⁸⁾、おそらく徐渭のそれと一致していたであろう。また熱狂的に道教の道を求め、煉丹を服薬し中毒のため嘉靖24年(1545)に死亡してしまった兄、徐淮の影響も大きい。さらに徐渭自身は礼部侍郎、王錫爵の娘で、神仙得道して万暦8年(1580)に死亡した曇陽子を信仰し、「曇大師伝略」を書き残している⁽¹⁹⁾。つまり(4)の表現はレトリック

クであり、実際の徐渭は女仙信仰を否定していないのである。

最後に、なぜ「日、月、風、雲」から詞を始めたのかについてみれば、確かに『初学記』などの分類はたいいて天文からはじまり、天文は天日月星雲風雷と続くから、天文を題とするならば不思議なことではない。だが仮にこの詞が下獄以降に作られたとすれば、『参同契』注釈との関連性が考えられないだろうか。徐渭の解釈では『参同契』は五行相類により『易』を解釈するものであり、「夫れ易とは日月なり、日月とは坎離なり」とは徐渭自身の言葉である⁽²⁰⁾。かく道教的、神仙的に傾いた詞を、倭寇戦を指揮した総督に呈するとは思えない。何よりも徐渭は自分の戦略の才を買ってほしかったはずだからだ。張元汴の代作として作詞したと考えるのはそのためである。だが本当にこの程度の典故を状元合格者が運用できないとも考えづらい。これら16首は応制詞の代作を模擬的に想定した、徐渭の純粋な創作と考えるべき性格の詞ではないだろうか。

註

- (1) 兪劍華編『中国美術家人名辞典』修訂本、上海人民美術出版社、1981年第1版2000年第9次印刷参照。
- (2) 宮崎1999、125頁から127頁、徐渭の項参照。
- (3) 張1990、5頁から65頁、第1章参照。
- (4) 張2002、1頁から5頁、緒論参照。
- (5) 中田1965、13頁、序説参照。
- (6) 梁1977引、149頁から150頁参照。陶望齡の「山人徐渭伝」は、もと『徐文長三集』巻首に置かれた。焦竑『国朝献徵録』巻115にも引く。傅維麟の『明書』徐渭伝、張廷玉の『明史』徐渭伝はみなこれにより、王鴻緒の『明史稿』文苑伝三、徐渭伝もほぼ同文。
- (7) 梁1977引、147頁から149頁参照。もと『徐文長三集』巻首に置かれた。『古文観止』に収録される。
- (8) 章培恒・駱玉明主編『中国文学史・下』復旦大学出版社、1996年刊取、第七編明代文学、第二章明代中期詩文参照。
- (9) 『上海博物館展』中日新聞社、1993年刊、134頁から135頁の全幅写真、及び241頁から242頁の富田淳による解説参照。
- (10) 中国古典文学基本叢書『徐渭集』（全4冊）中華書局、1983年刊。
- (11) 通行本徐渭集が出版される前に趙尊嶽により『明詞彙刊』が編纂されており、そのなかに「徐文長先生詞」として7首、後に輯佚として手書きで書き込まれた詞が2首（実数3首）、計9首が集められている。最初の7首は袁宏道評点本に拠ることが記されている。この袁宏道本が陶望齡のいう文長集と同じなのか、それとも『三集』と同じなのかは待考。なお『明詞彙刊』そのものは再校本が1966年に復旦大学図書館に一旦収蔵された後ふたたび所有者に返還され、1992年によりやく影印本が上海古籍出版社より刊行された。また2004年には饒宗頤初纂、張璋総纂『全明詞』（全6冊）が中華書局より出版され、徐渭の詞も集められているが、巻頭に掲げられている「引用及参考書目」には徐渭関連では「『青藤書屋文集三十卷補遺一卷』明、徐渭撰、有鉛印本、叢書集成本」があるのみであるから、版本に拠ったのではなく、後世の編纂本、しかもその編纂本は『三集』を換骨奪胎して節略した鍾人傑本に依拠したものであることが解る。『三集』26首は収録するが、『逸稿』を見ておらず、かわりに崇禎6年序刊、卓人月、徐士俊合輯『古今詞統』から、竹枝詞4首と『逸稿』にも見える詞1首を収録する。『古今詞統』は明末における詞の評選の状況を知るには貴重な資料ではあるが、決して全集を目指したものではない。従ってこの『全明詞』という書物は、こと徐渭詞に関しては「全」とは言い難いことを注記しておく。
- (12) 梁1977、39頁、第3篇詩与詞、1内容特徴与評論参照。
- (13) 他にも、張2002は「徐渭は詞を書画、詩文、戯曲の余事とみなし、技巧、心を用いて作ったものは少なく、その場の戯れであり、書いては失くしてしまうため、散逸したものが多く、代応制の作以外は「多く詞を遊戯とする」ものであり、よく書けたものは「言葉は簡潔で、風格は俊快で、徐渭がやはり詞才のあることを表わしているが、ただ力を用いなかっただけである」と述べている（226頁から227頁）。
- (14) 梁1977は張元汴のために典故のイメージを提供したものとする（39頁）。張2002は胡宗憲の幕府に

- 参加していたときに代作したものとする (227頁)。
(15) 以下、徐渭の生涯については主に張1990を参照。
(16) 『畸譜』は徐渭集1325頁から1331頁を参照。
(17) 安居香山, 中村璋八輯『緯書集成』河北人民出版社, 1994年刊, 488頁参照。
(18) 徐渭集634頁から635頁参照。
(19) 徐渭集1039頁から1040頁参照。
(20) 徐渭集473頁から478頁, 「答人間參同」参照。

引用文献

- 中田1965 中田勇次郎著『歴代名詞選』(漢詩体系24) 集英社, 1965年刊収「序説」
梁1977 梁一成著『徐渭の文学与芸術』芸文印書館, 民国六十六年(1977)刊
張1990 張新建著『徐渭論稿』文化芸術出版社, 1990年刊
宮崎1999 西岡康弘, 宮崎法子責任編集『世界美術大全集, 東洋編, 第8巻, 明』小学館, 1999年刊収,
第1章絵画, 宮崎法子「明代の絵画」
張2002 張仲謀著『明詞史』人民文学出版社, 2002年刊

参考文献

- 内山知也 『明代文人論』木耳社, 昭和61年11月15日発行収, 第6章「徐渭の狂気について」(原載は
『大東文化大学創立六十周年記念中国学論集』昭和59年12月刊行)
佐藤 保 『漢詩のイメージ』大修館書店, 1992年刊 (待続)